

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2010～2012

課題番号：22243048

研究課題名（和文）

発展途上国の持続的発展を担う次世代育成システム改善に関する研究

研究課題名（英文）

Research on the Improvement of a Teacher Education System to foster the Next Generation for the Sustainable Development in a Developing Country

研究代表者

棚橋 健治 (TANAHASHI KENJI)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40188355

研究成果の概要（和文）：

本研究は、発展途上国における次世代育成システムの改善を支援するモデル構築を図るもので、中米ドミニカ共和国サントドミンゴ自治大学（UASD）教育科学部との連携により実施した。広島大学がUASDにおける教員養成プログラムならびにその授業の改善に寄与する研修プログラムを開発し、それを実際にUASDの教員研修プログラムとして実施し、その効果等の検証を踏まえてモデル化した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to develop a model to assist in the improvement of teacher education in developing country as a joint project with the Faculty of Educational Science of the UASD in the Republic of Dominica. Hiroshima University studied and developed a training program that can contribute to the improvement of the teacher education program and lessons in the UASD.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	9,000,000	2,700,000	11,700,000
2011年度	8,000,000	2,400,000	10,400,000
2012年度	9,100,000	2,730,000	11,830,000
年度			
年度			
総計	26,100,000	7,830,000	33,930,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教員養成、教師教育、教員研修、教育学、教科教育学、授業研究、ドミニカ共和国、Faculty Development

1. 研究開始当初の背景

本研究は、教育分野での国際協力の重要性が言われる現在の国際社会にあつて、教育立

国に成功した日本が、その成果を世界に発信する一方途として、発展途上国における次世代育成システムの改善を支援するモデル構

策を図るものであり、中米ドミニカ共和国をフィールドとして、教師教育の実態を調査し、その特徴と課題を分析し、提言できる改善策を考察するものである。

発展途上国の多くは、自国の発展のために産業立国を図る。そのため、初期においては先進工業国の産業を誘致し、自国内に工場を建設するという直接的な方法をとるが、その後、それらの工場から自国への技術移転を図る。そのため、自国の高等教育において、産業立国を担いうる人材を育成することへと進むことが多い。

自国の高等教育での人材育成は、工業の発展を直接的に担いうる人材育成が中心となるため、多くの場合、先進工業国に対して「ものづくり教育」の支援を求める。しかしながら、そのプロセスが必ずしもうまくいかないケースも多い。その理由で最も重要かつ中心的なものは、高等教育に先立つ初等・中等教育が十分に機能していない場合が多いことが挙げられる。すなわち、初等・中等教育の機会の拡大は進んでいても、そこにおける子どもの“学び”および教師の“教え”に改善の余地があり、それが高等教育における高度な人材育成を十分に機能させない主因になっていることが多い。

均衡のとれた国際社会の発展のために、発展途上国における教育の普及が欠かせないことは、国際社会において広く認められるところである。発展途上国自身の努力とともに、国際社会がそれを支援することが求められる。

天然資源に乏しい日本は、人的資源の開発によって、その発展を図ってきた。教育は国づくりであり、国の発展と安全保障の実現に資するものとするにより、今日の繁栄を獲得した。そのような考えにもとづいて、発展途上国の人づくりに積極的に関わること

を、たとえば、2002年のG8カナナスキスサミットで発表した「成長のための基礎教育イニシアティブ (BEGIN: Basic Education for Growth Initiative)」などで表明している。

教育分野の国際協力において、日本がこれまで蓄積してきた経験及びそこから得られた知識を活用すること、そしてそのためのネットワークの形成は、日本の教育学の21世紀の新たな発展にとってもきわめて有効であり、そのモデルの開発が求められる。

発展途上国の教育を改善し、発展をより確かなものにするためには、教育施設の改善やそもそも就学環境の改善から始める必要があるが、同時に、教員の質を向上させることが不可欠である。

広島大学大学院教育学研究科・教育学部は、その前身である明治時代設立の広島高等師範学校以来、日本の教員養成の中核を担ってきた。また、授業の学問的研究を積極的にすすめ、その方法論の研究が盛んであり、国内外に発信しており、教員の質向上に関する研究拠点のひとつとなっている。広島大学がリードしてきた教員の質向上のひとつの方法が、教員が授業を科学的に分析し、それに基づいて改善するという授業の学問的研究の能力の向上である。

本プロジェクトは、教員養成の中心を中等教育段階の職業訓練としての教員養成学校から、高等教育段階の大学へとシフトしようとしているドミニカ共和国の大学教育の質的向上について、広島大学とUASDが共同で取り組んだものである。

現在、ドミニカ共和国高等教育・科学技術省は、初等・中等教育を管轄する教育省やその他の関連諸機関と連携しつつ、「高等教育十ヶ年計画 2008-2018」「教育十ヶ年計画 2008-2018」に基づき、教員養成制度の改革を実施している。これは、教員養成課程に係

わるスタンダードを設定し、質の向上を求めるものである。また、UASDにおいては、2008年、人文学部内に教育学科として存在した教員養成課程を前身として、教育分野の専門職養成のために教育科学部の設置が承認された。新教育科学部では、教員養成課程スタンダードに沿いつつ、UASD独自の使命や理念に基づいた新カリキュラムが策定され、組織作りと授業改善の取り組みが進められている。こうした状況にあって、本研究は時宜にかなうものである。

2. 研究の目的

本研究は、UASD 教育科学部と共同で、発展途上国における教員養成の改善を支援するモデル構築を図るものである。具体的には次の4点を目指す。

- (1) UASD 教育科学部において、教員養成課程・授業の改善を目指して、FD (Faculty Development) としての授業研究を導入し、定着を図る。
- (2) (1)のプロセスにおいて、研修プログラムを研究・開発する。
- (3) (1) (2)のプロセスにおいて、UASD 教育科学部における教員養成の実態を把握し、その特徴と課題を明らかにする。
- (4) (1)～(3)の分析に基づき、広島大学大学院教育学研究科の教育経験を活かした改善策を考察し、ひいては発展途上国の持続的発展を担う次世代育成システムの改善支援モデルについての展望を得る。

3. 研究の方法

本研究の中核となるのは、「FD」と「授業研究」である。教員養成課程や授業の改善を目指して、本研究は UASD 教育科学部と共同でFDとしての授業研究を導入した。そして、

その定着のために、広島大学は研修方法・教材の開発的研究を行った。

UASD 教育科学部において本研究を継続的かつ自律的に実施していくためには、「学部の組織的成長」と「大学教員個人の職能成長」の二つの側面から研究を推進することが重要であった。また、この二つをつなぐために、教科別研究グループによる活動の組織化と活性化が図られた。

その成果は、各教員のティーチング・ポートフォリオとしてまとめられた。本研究におけるポートフォリオは、①授業を自己評価し改善を図るツールや②成果を同学部内外に発信し共有するツールであると同時に、③広島大学が行う開発的研究の評価ツールでもある。

4. 研究成果

本研究で開発された研修と UASD 教育科学部の組織面での成果は次の通りである。

- (1) 授業研究の定着：グループごとの進捗に差があるものの、実際に計画的かつ自律的な授業研究が行われた。授業研究の枠組み自体は、定着したと言える。
- (2) 授業観察と協議の改善：2012年度の研修において授業観察と協議の質向上に焦点化した結果、①授業研究の意義や目的の再確認、②ポストイット等を活用した観察とグループ協議、③改善策についての建設的な協議について、発展が見られた。
- (3) 自立発展性の確保：グループによる活動の活性化のために、執行部と教科コーディネーターは随時会合を持ち、学部長を中心とする連携や指導が行われた。毎年行われた日本での研修から帰国後には、学部全体として成果を共有するセミナーなどが自律的に開催さ

れた。2013年1月の事業報告会終了後には、現在の中核メンバーが、UASD分校にて授業研究に係わるセミナーを実施予定である。

- (4) データ収集と分析に対する認識：ポートフォリオや成果発表資料をとりまとめる過程で、データ収集と分析の重要性について認識しつつある。各グループの研究成果は、次の研究課題につながっていくことが期待される。
- (5) 省察する態度：授業改善に向けて、課題を自らのうちに見出し、改善に取り組む省察の重要性が徐々に認識されている。
- (6) 同僚性の涵養：授業研究の実施にあたって、授業に関する知見を交換する機会が増え、教科グループ内ひいては研究メンバー全体の同僚性の向上に寄与した。
- (7) ドミニカ型授業研究の萌芽：研究授業後の検討会に学生もオブザーバーとして参加し、学生に対して授業研究の意義を伝えようとする場面が複数回みられた。こうした試みは、ドミニカ型の授業研究を構築しようとする努力として評価できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

1. 木村博一、丸山恭司、岡村美由規「教員養成担当の大学教員の講義力向上の試みー広島大学とサントドミンゴ自治大学(ドミニカ共和国)の連携による取り組みの場合ー」第3回教師教育学会国際研究大会、2012年12月06日～2012年12月09日、華東師範大学、上海、中華人民共和国

2. Kenji TANAHASHI, Yasushi MARUYAMA, Significado, Características y Metodos del Desarrollo de las Capacidades de los Docentes Universitarios: Introduccion del “Estudio de la Clase” para formar a docentes comprometidos con el aprendizaje continuo, 1er Congreso de la Facultad de Ciencias de la Educacion por un Mundo Mejor: Currículo y Formacion Docente. (招待講演) 2013年4月21日、Biblioteca Pedro Mir, UASD, Santo Domingo, Dominican Republic

6. 研究組織

(1) 研究代表者

棚橋 健治 (TANAHASHI KENJI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：40188355

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

木村 博一 (KIMURA HIROKAZU)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：10186330

小山 正孝 (KOYAMA MASATAKA)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：30186837

山崎 敬人 (YAMAZAKI TAKAHITO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：40284145

丸山 恭司 (MARUYAMA YASUSHI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：30253040

曾余田 浩史 (SOYODA HIROFUMI)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60253043